

水稲品種「まなむすめ」の栽培法（第 73 号追補）
－「まなむすめ」の幼穂形成期生育量及び収量構成要素の目安－

農業センター・古川農業試験場

1 取り上げた理由

水稲品種「まなむすめ」の施肥法、栽植密度及び刈り取り始期については、普及に移す技術第 73 号に示した。さらに追肥時期に当たる幼穂形成期の生育及び収量構成要素について検討したところ、その目安が得られたので同号の追補とする。

2 普及技術

1) 「まなむすめ」の粒厚 1.9 mm 以上の目標収量は 10a 当たり 580kg 程度である。このときの m² 当たり 籾数は 27,000～30,000 粒で、穂揃期の栄養条件として窒素吸収量 7.3～8.0g/m²、乾物重 900～1,000g/m² が目安となる。

2) 前記籾数を目標とした場合、「まなむすめ」は次の幼穂形成期(追肥前)生育量を目安とする。

窒素 吸収量 (g/m ²)	稲体 乾物重 (g/m ²)	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉色 (SPAD)
5.3～6.0	330～400	65～70	500～600	33～35

3) まなむすめの収量構成要素等の目安は次のとおりである。

m ² 当たり 籾数 (千粒/m ²)	一穂 籾数 (粒/本)	穂数 (本/m ²)	千粒重 (g)	登熟歩合 (%)	全重 (kg/a)	窒素 吸収量 (g/m ²)
27～30	67～71	390～440	23.7	85～90	140～150	9.5～10.0

3 利活用の留意点

- 1) 肥培管理は、普及に移す技術第 73 号の追肥法（幼穂形成期追肥に窒素成分で 2kg/10a）に準ずる。
- 2) 窒素吸収量及び乾物重の推移については、稲作情報等を参考にする。
- 3) 穂揃期の窒素吸収量が増加すると玄米窒素濃度が高まる傾向が見られるので、上記の窒素吸収量の目安を超えないことが望ましい。
- 4) 復元田等、穂首分化期以降の地力窒素の発現量が多い場合には適用できない。

（問い合わせ先：農業センター農産部 電話 022-383-8246）

4 背景となった主要な試験研究

1) 研究課題名及び研究期間

商品性の高い宮城米の高水準安定生産技術の確立(H7~9)
 新品種栽培法の早期確立(古川農業試験場、H8~10)
 優れた品種特性を生かした水稻栽培技術の確立(H10~11)

2) 参考データ

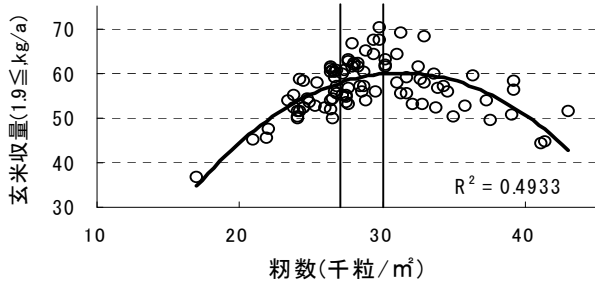


図 1 粒数と玄米収量

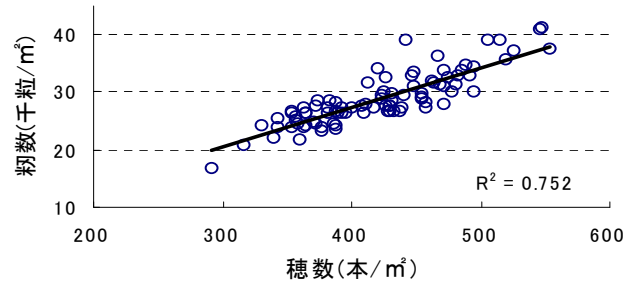


図 2 穂数と粒数

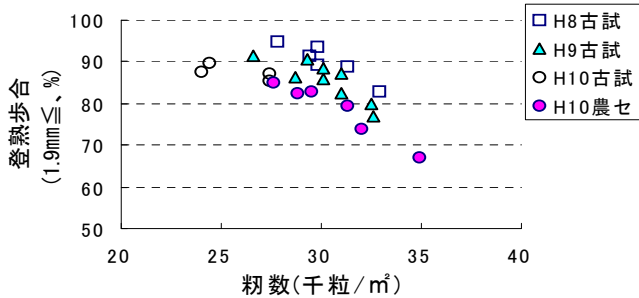


図 3 粒数と登熟歩合

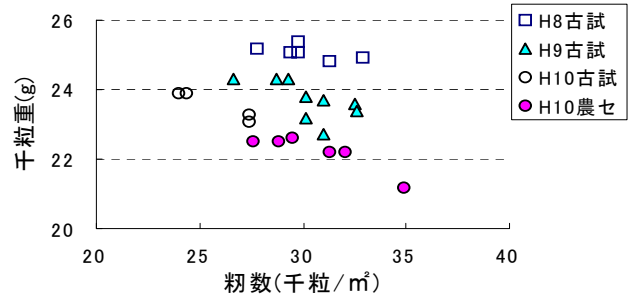


図 4 粒数と千粒重

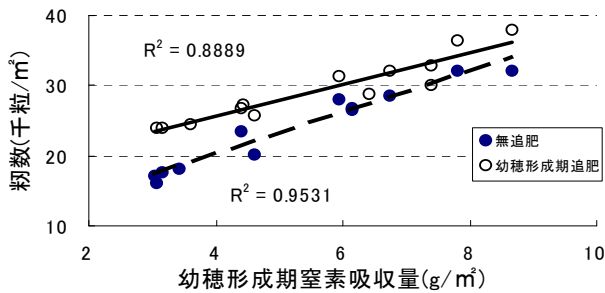


図 5 幼穂形成期窒素吸収量と粒数

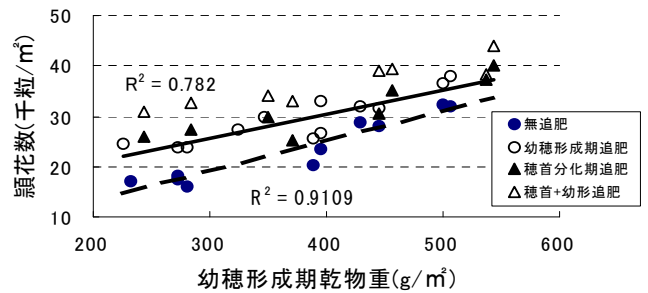


図 6 幼穂形成期乾物重と穎花数

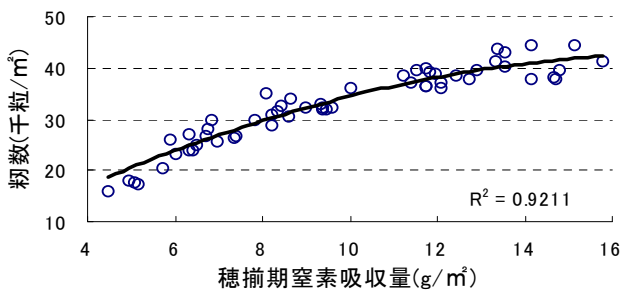


図 7 穂揃期窒素吸収量と粒数(H11)

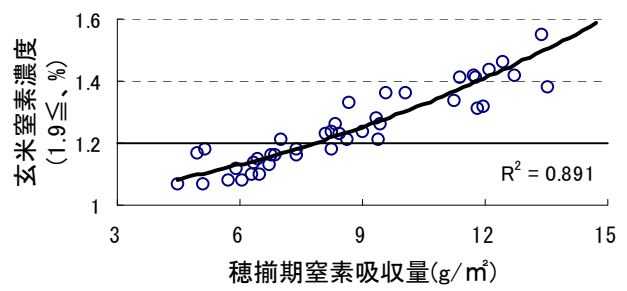


図 8 穂揃期窒素吸収量と玄米窒素濃度(H11)

注) 良好な食味のためには玄米窒素濃度 1.2%以下が望ましい。

3) 発表論文等 未定